



菩薩の心を求めて

学校法人 四天王寺学園
理事長

塚原 昭應
あきひと (昭人)

本年4月1日付で、学校法人四天王寺学園理事長に就任いたしました私は、宗教法人和宗宗務総長、四天王寺代表役員執事長、社会福祉法人四天王寺福祉事業団理事長を拝命しております。塚原昭應（本名 昭人）と申します。もとより、拙僧自身は、浅学非才の凡夫ではありますが、ここに至るまでの40数年の間に、四天王寺大学（旧 四天王寺国際仏教大学を含め）の教授職や教学・管理運営部門の要職を歴任し、あわせてこの間には、学校法人の理事・評議員・常務理事を長年勤めてまいりました。

これよりは、建学の祖 聖徳太子様や四天王寺学園に報恩感謝するべく、全くもって浅薄ではありますが、私自身の学園時代に培った知見や経験を基にして、皆様様の夢や希望・大いなる志が叶うように、微力ながらも精一杯、真摯に取り組んで参る所存であります。先ず、その端緒として、拙僧が大切にしている、仏教世界の「菩薩」の心がけや行動指針を三つご披露いたしましょう。

一つ目は、「悉有仏性」です。仏教では「一切衆生悉有仏性」と申して、森羅万象生きとし生けるものすべてが尊い存在であり、仏様のような立派な人間になれる種、いわば資質・能力がすべてのものに備っていると、普遍的真理かつ絶対的平等が説かれています。

利害得失が横行する現代社会にあっても、われわれは共に生きていること、共に助け合い共に生かされていること、お互いに尊い存在であることを意識し、この「悉有仏性」を前提として、各々

の役割・役どころにおいて、誰に対しても礼節を保った姿勢・態度、言動に努めて参ることが肝要となります。

二つ目は、「悉有仏性」を礎に、阿弥陀如来様が法蔵という菩薩の時代に取り組みられた修行で、「和顔愛語」つまり、柔らかな表情と優しい言葉遣いの修行であります。「和顔愛語」の言葉には「先意承問」という言葉が続きます。つまり、相手の立場（身）になって、和やかな笑顔と慈愛に満ちた温かい言葉を用いて、相手の気持ちを大切に考えながら、先んじて動くこと。これが仏の智慧に支えられた、菩薩の取り組むべき生き方とされます。

三つ目は、「自行化他」であります。まさに聖徳太子様が看破された菩薩の働き、行動指針です。仏教世界では、「仏」すなわち「如来」様が最高位に就かれます。その次に位置されるのが「菩薩」様であり、菩薩は本来、ご自身の修行に専念されれば、速やかに如来になられる方々です。

しかしながら、森羅万象生きとし生けるものすべてのものが、慈悲救済されるまでは、菩薩自身、如来の地位に安住することを良しとしない、堅き誓いを保たれた求道者、修行者であります。聖徳太子様は、この「菩薩」の役割・役目に注目されて、「自ら悪い行いをとどめて正しき行いに努めることは、己がためでもあるが、それよりも自分自身の行いを正すことによって、他者を正しく教え導く」、この菩薩の化他行に注視されました。つまり、「自行化他」行を菩薩が率先垂範される実践行として重視されました。

まさに、本学園は、建学の祖 聖徳太子様が、敬田院設立の精神に込められた存意、すなわち人々が「菩薩の心」を範とした言動・行動に努め、平和な国づくりや人々の幸せづくりに貢献する人間育成の学舎となります。

以上、纏々雑感を申し述べましたが、学園に集う皆様様との協働・協調・協和のステージにおいて、拙僧自身、「悉有仏性」「和顔愛語」「自行化他」を堅持し、微力ながらも四天王寺学園の継承・発展に向けて、尽力して参ります。

何卒、今後ともご高配の程よろしく願い申し上げます。合掌



ご縁をつなぎ、 未来を育む

財務企画課
課長

今西 智徳
ともりのり

私は浄土宗の寺院に生まれ、幼いころからお釈迦様の教えの中で育ちました。阿弥陀如来の慈悲、そして「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えることの尊さを、自然と身近に感じながら過ごした日々は、私の人生の土台となっています。そうした環境の中で、「いのちを大切に作る心」や「ご縁を尊ぶ姿勢」は、知らず知らずのうちに育まれていったように思います。

ご縁をいただき、学校法人四天王寺学園 四天王寺大学に職員として勤めるようになってから、いつの間にか二十年以上の歳月を過ごしています。現在、本学は5学部2研究科1短期大学部を擁する総合

合大学として、多様な学びの場を提供し、多くの学生が未来を切り拓いています。

本学は、聖徳太子様の教えを建学の精神とし、仏教の慈悲と智慧を教育の基盤に据えています。その教育理念は、私自身のこれまでの歩みにも深く重なることが多く、「支えること」「寄り添うこと」の大切さを、日常の中で実感しております。また、聖徳太子様の「和を以て貴しとなす」という教えは、現代にも通じる普遍的な価値観であり、浄土宗の開祖・法然上人が説いた「すべての人が救われる」という念仏の教えとも重なります。

大学とは、単に教室で知識を得る場にとどまらず、学内のあらゆる場面で成長の機会に満ちた「学びの場」であると考えています。窓口での一言、行事の準備、手続きの説明、日常の一つひとつが、学生の心を育み、人生を支える貴重な体験につながります。そういえば、大学そのものが人生の歩み方や心のあり方を学ぶ「道場」であり、そこに関わる私自身もまた、日々のお会いや出来事を通じて成長させてもらっているのだと感じております。

これからも本学の理念を大切にしながら、学生の可能性に寄り添い、地域や社会とともに成長していけるよう努めてまいります。

❖ 学園訓「和」について—和の精神と対話してみよう—

教育学部 教育学科
専任講師

西口 卓磨



今回は、学園訓の中から「和を以て貴しとなす」に注目し、和の精神との対話を通して、現代社会に生きる私たちに活かせることについて、私なりに考えてみたいと思います。また、対話を「互いの立場や意見の違いを理解し、共感や相互理解を深めることを重視した話し合い」と捉えたとき、和の精神との対話をどのように捉え、どのような意義があるのかについても考えてみます。

みなさんもご存じの通り「和を以て貴しとなす」は、十七条憲法の第一条に示されており、十七条憲法においても学園訓においても根本に位置付けられる「和の精神」について説いたものです。ここでは、十七条憲法の第一条を含む、3つの条文の現代語訳（一部抜粋）を紹介します。

（第一条）和を貴び、反抗したりすることのないのを基本と心がけよ。（中略）しかし上の者が和やかで下の者が睦まじく親しみ、そうした穏やかな空気の中で意見を述べ合えば、自然にものの道理がわかり、すべてのことがうまくいく。

（第十条）心の中の怒りを絶って、人が逆らっても腹をたててはならない。人にはみなそれぞれの心がある。その心にはおのおのこだわるところがある。相手が正しいと考えることを、私はまちがっていると考え、私が正しいと考えることを、相手はまちがっていると考える。（中略）。正しいかまちがっているかの道理を、誰が〔絶対的に〕判定できるだろうか。…（後略）

（第十七条）ものごとを独断で行ってはならない。必ずみなと意見を交換するようにすべきである。…（後略）

十七条憲法では、第一条で説かれている「和の精神」が、第二条以下の全条文と密接に関連しており、どの条文も和の精神に基づいていると考えられます。こうした前提をふまえ、特に私が注目した3つの条文から、現代社会において学べることについて考えてみたいと思います。

第一条からは、対等な関係性をつくることの重要性がうかがえます。近年、学校や社会において議論することの重要性が指摘されることも少なくありませんが、果たしてコミュニケーション力があれば議論は成り立つのでしょうか。みなさんの中には、意見はあるけれども発言しづらいと感じた経験がある方もあるのではないのでしょうか。その背景には、対話する相手との関係性がかかわっています。上下関係や権力関係が存在している場合、安心して言いたいことが言いつらくなることもあります。さまざまな意見を伝え合うためには、どのような関係性を築いていくかが重要であると考えられます。

第十条からは、物事を捉えるにあたって多様なものさし（考え方や価値観など）の存在に気づくことの重要性がうかがえます。また、自分自身が無意識に持っている「あたりまえ」や「ふつう」を問い

直すことの大切さも示唆されています。現代社会にあるさまざまな対立（問題）の背景には、私たちの間に存在するさまざまな考え方や価値観の違いから生まれるものもあります。こうした対立を解消するためには、偏見を排除し、多様性を尊重して相互理解を深める姿勢が大切と言えるでしょう。

第十七条からは、仲間との議論を通して、合意形成することの重要性がうかがえます。これは単に多様な意見をふまえてより合理的で、よりよい結論を導くことの大切さだけではありません。第一条から読み取れる権力構造によって伝えたいことが伝えられないことや、第十条から捉えられる多様な考え方や価値観の違いによる対立があることをふまえると、何か物事を決定するということは誰かを排除してしまうことになり、誰かの幸福や可能性を奪ってしまうことになるかもしれません。こうした懸念を少しでも減らすためには、対話を重ね、相互理解をふまえた合意形成をめざす姿勢が、現代社会への示唆にもつながるのではないのでしょうか。このように、さまざまな立場の人とともに対話を重ねて物事を決定するプロセスにおいて、人権を基盤とすることの重要性は、近年の国内外の研究や教育実践でも指摘されてきています。

このように、私は和の精神には現代社会に生かせる視点がたくさん含まれており、十七条憲法は私たちにその問題解決のヒントを与えてくれていると捉えてきました。しかし、このヒントは私自身が関心を持っている視点から意味づけたものであり、また私の価値観が反映されているものです。みなさんは、また違ったヒントを得たり、考えたりした人もいないのでしょうか。

こうしたことをふまえ、最後に和の精神と対話することの意義について考えてみます。みなさんは、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業を通して、どのようなことを学んでいますか？これまでたくさんの先生方からの建学の精神に関わる講話や、学内外で活躍されている先輩方からの和の精神に関わるエピソードを通して学びを深めてきたのではないかと思います。しかし、学んだ内容は同じかもしれませんが、みなさんがその学びをどのように意味づけたか、受け止めたかは一人ひとり異なるはずで、なぜなら、みなさん一人ひとりが生きていくうえで持っているであろうものさし（信念や価値観など）によって変わってくることでしょうし、それぞれの時代や場所、置かれている状況によっても変わってくるでしょう。そして、和の精神を自分自身がどのように意味づけたかなどを俯瞰して捉えることは、自分自身のアイデンティティや価値観、自分自身が置かれている状況について知ることにもつながります。つまり、みなさんが和の精神と対話することによって、和の精神と自分自身のどちらについてもより一層理解を深めることができるということです。

今回、貴重な機会をいただいて私なりの考えを述べてきました。本稿は和の精神との対話の一つの事例にすぎません。複雑で変化の激しい多様な社会において、私自身はどのように社会にかかわっていくべきかについて常に自問自答していますが、本稿を通して自分自身のこれまでの考えや価値観を整理することができました。みなさんは本稿を読んで、どのようなことを考えましたか？ぜひみなさんにはこれから和の精神と対話することを大切にしてほしいですし、私自身もこれから生きていくうえでの支えの一つとして和の精神を位置づけつつ、次世代を生きていく人たちにも継承できる部分は継承していきたいと思っています。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただけの学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方なら誰でも歓迎します。学部学科専攻も問いません。これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として

実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。



（若松 正見）

西教寺（滋賀県）

第 27 回卒業生インタビュー

話し手: 加藤 遼(かとう はるか) 大阪市立総合医療センター/令和7年3月 看護学部看護学科 卒業
聞き手: 上野 舞斗(うの まむと) 文学部国際コミュニケーション学科専任講師、本欄編集

仕事について

令和7(2025)年4月に大阪市立総合医療センターの手術センターへ入職しました。年間およそ12,000件の手術を抱える国内屈指の現場で、オペ室専属の新人看護師として、その一端を担っています。勤務は朝8時の点検・準備から始まり、最初の患者さまが8時45分に入室。多い日は1日6件の手術に携わっています。

私の役割は、器械を手渡す「器械出し」と、麻酔導入前から覚醒直後まで患者さまを見守る「外回り」です。後者では、術前に不安で涙をこぼす患者さまに寄り添い、術後に覚醒した瞬間に「ありがとう」と感謝されることもあります。「どんなに忙しくても患者さまが最優先」という職場全体の共通認識のもと、チームとして患者さまに寄り添うことをモットーに日々勤務しています。

「和の精神 I・II」について

1年生の「和の精神 I・II」は、読経・写経・瞑想といった実践行を通じて、自分と静かに向き合う時間でした。わたしは四天王寺学園出身者だったので瞑想や読経には慣れていましたが、写経は大学で初めて経験しました。目の前の一文字に心が吸い寄せられていくような、それまでに味わったことのない深い集中の感覚が、今も強く印象に残っています。また、高校・大学を通じて瞑想で培った「心を整える」感覚は、緊張度の高いオペ室で真価を発揮します。症例ごとに深呼吸をすることで気持ちを整え、次の患者さまへ落ち着いた気持ちで向き合うことができます。社会人となった今、ひと息の「内なる瞑想」がちよっとした秘訣になっています。

「学園訓」について

学園訓のなかで、学生時代から最も胸に刻んできたのが「四恩に報いよ」です。看護師国家試験の模擬試験ではC判定が続き、心が折れそうになり、泣き崩れた夜もありました。そんな中でわたしを救ってくれたのは両親と友人たちでした。両親には「完璧を目指さなくていい」という声をかけてもらい、救われました。朝から夜までサテライトキャンパスで試験に向けて学び合った仲間存在に支えられました。今も職場には、本学卒の同期が7人います。その存在はとても大きな励みです。こうした両親や友人、恩師をはじめとした他者の支えがあってこそ、自分があると気づかされます。また「誠実を旨とせよ」という教えは、日ごとにその重みを増し

ています。患者さまに「大丈夫ですよ」と伝えるとき、そこには確かな根拠と責任が伴います。できない約束はしません。言葉どおりの行動を示すことが求められます。こうした姿勢が、誠実さが看護の原点であることを痛感します。学生時代も頭では、誠実が単に正直であることとは違うということはわかっていたつもりでしたが、働きはじめてから身をもって、その本当の意味を理解したところです。



在学生へのメッセージ

大学の4年間(短期大学部の2年間)は長いようであつという間です。看護学部の学生の方は、看護実習に国家試験と、息つく間もない日々を過ごしておられるかもしれません。私も3年次の実習では2週間ごとに小児科や急性期病棟をローテーションし、息がつまるほどの緊張と向き合ったことを覚えています。しかし、その経験が、多忙な手術センターでも動じずに動ける基礎体力になっています。今、皆さんが取り組んでいることは、きっと将来の自分の力になります。とはいえ、緊張の糸を張り続けることはできません。そこで、どうか自分なりの「息抜きの方法」を見つけてください。私の場合は、編み物やソフトテニス、アニメ鑑賞が「息抜き」でした。色々な悩みを完全に忘れられる時間が、翌日の集中力を生みます。

また、大学の講義で得た知識を自分の言葉で説明できるようにしてください。患者さまの不安を和らげること一つをとっても、それができるのは、マニュアルではなくあなた自身の声です。わたしは、手術後に「あなたがそばにいてくれて良かった」と言われた瞬間、幼い頃からの夢が叶ったと心の底から感じました。今も学ぶことばかりの毎日ですが、一つひとつの知識を自分のものにすべく、日々を過ごしています。

大学での学びは確実に皆さんの将来につながっています。どうか目の前の学びと経験を大切に、4年後の自分に誇れる今日を積み上げてください。応援しています。

令和7年度 夏学期「和の精神 I」講話題目

4月10日	桃尾 幸順先生	礼拝オリエンテーション	5月29日	上野 舞斗先生	「卒業生インタビュー」から考える「和の精神 I・II」の意義
	藤谷 厚生先生	受講どころえー授業規律に関して/ウパーヤについて	6月5日	坂本 峰徳常務理事	聖徳太子の教えと建学の精神
4月17日	須原 祥二学長	『和の精神』で学ぶこと		看護学部・社会学部学生	認知症啓発学生サークル Orange Project
	桃尾 幸順先生	授戒オリエンテーション			認知症カフェの活動報告
4月24日	杉中 康平先生	『和の精神』を学ぶ意義	6月12日	原 祐子先生	「聖歌」について
	丹羽 智美先生・PIATA 学生	学修ポートフォリオの目標設定について	6月19日	仲谷 和記先生	薬物乱用の害について
5月1日	桃尾 幸順先生	学生生活について	6月26日	奥羽 充規先生・学生	グローバル教育研修と和の精神
5月8日	成田 由岐子先生	読経概論・瞑想 一心を整える楽しみー	7月3日	藤井寺保健所	性感染症の予防について
		学生生活とリスク社会について	7月10日	杉中 康平先生	学修ポートフォリオの記録について
		~犯罪に巻き込まれない、起こさないために~		藤谷 厚生先生	夏学期を終えるに当たって
5月15日	中田 貴真先生	学園訓ー礼儀についてー			
5月22日	矢羽野 隆男先生	学園訓ー和についてー			

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

平隆寺(奈良県生駒郡三郷町)

奈良県生駒郡三郷町勢野の緩やかな丘陵に静かにたたずむ平隆寺は、今なお聖徳太子との深い縁を静かに語り継ぐ、古代信仰の面影を宿す寺院です。中世の法隆寺文書にも登場し、施鹿園寺や平群寺とも呼ばれていました。伝承によれば、聖徳太子が河内へ向かう道中、一匹の鹿が犬に噛み殺される場面に出くわしました。太子はその鹿の死を深く悼み、夢の中で「鹿は正妻、犬は側室の生まれ変わり」というお告げにより、その鹿が太子の正妻の生まれ変わりであったことを悟った太子は、鹿の霊を弔うために一字を建立しました。これが施鹿園寺、後の平隆寺とされています。

平隆寺のすぐ南を通る古道は、かつて奈良と河内を結ぶ重要な道筋であり、太子もしばしば行き来したと伝えられています。また、この地は大和川の北方の丘陵地帯に位置し、眼下に大和川が流れていて、古代の有力氏族・平群氏の本拠地とされています。この地域では、6世紀の前方後円墳や瓦窯跡が多く確認されており、平隆寺はその中核的存在であったことがうかがえます。昭和49年・平成10年の発掘調査では、塔や金堂の基壇が見つかり、四天王寺式伽藍配置を採っていた飛鳥時代の大寺であったことが明らかになりました。そして、そんな平隆寺を支えた瓦の供給元が、近隣の辻之垣内瓦窯跡です。平隆寺から北へと歩を進め、住宅街の



平隆寺

間を縫うように急で長い坂道を登り詰めた先にある公園の一角にこの窯跡は存在しています。ここでは地下式登り窯が複数発見されており、平隆寺式と呼ばれる軒瓦が焼かれていた痕跡もあります。窯の構造や焼成品の特徴から、飛鳥時代に平隆寺へ瓦を供給していた中心的な施設であったと考えられます。とりわけ2号窯からは良質な瓦が出土し、これは当時の高い技術力と組織的な瓦生産体制を示しています。

平隆寺と辻之垣内瓦窯跡は、四天王寺大学からも比較的近く、電車やバスでのアクセスも容易です。いずれも観光地化されているわけ



平隆寺の瓦を焼いた辻ノ垣内瓦窯跡

ではありませんが、だからこそ、手を加えられていない歴史の息づかいがそこにはあると思います。太子信仰を今に伝える平隆寺と、それを陰で支えた職人たちの営みを知る貴重な手がかりが触れられる絶好の場所です。時の流れを越えて静かに語りかけてくる場所を歩き、伝承と古代の土と火の記憶に立ってみることで、千年の時を超えたつながりを感じることができるのではないのでしょうか。

(学生編集員 吉田 太樹)

仏教のことば

あんじん

安心

普段の生活の中でつらい思いや苦しい経験をして悩んだ時に、何とか心の安らぎを得たいと思う際に使用される安心という表現も、実は仏教のことばなのです。

安心ということばは、一般的には「あんしん」と呼んで、「心配や不安がなく、心が落ち着いて安らかな状態」をいいますが、仏教では「あんじん」と呼び、「信仰によって恐怖や不安から解放され、到達した心の安らぎ、不動の境地」を意味します。

そのような境地を目指す修行として、聖道門といって自力による精神的な修行や実践を重視し、個人の努力や鍛錬によって悟りを開こうとする道

と、浄土門といって他力、つまり阿彌陀如来の誓いを信じ、念仏によって西方極楽浄土に往生することを願う道があるとされています。

安心立命ということばがありますが、「心を安らかにして身を天に任せ、どんな場合も動じないこと」ですが、仏教の「安心」と儒教の「立命」、つまり、「自分の命は天から授かったもので、それを全うすること」という意味からなることばです。

また、仏教には、安心決定ということばもあり、「仏の誓いを信じて少しも疑いなく心が定まること」という意味の教えです。

このようなことばで信仰の世界が説かれるのも、それだけ我々の生活にはいつの時代にも悩みや苦しみが満ち満ちているからだと思います。

安心ということばを改めて思い返し、自らの心を整えつつ、少しでも、悩み苦しむ人々に寄り添い、安らぎを与えられるような自分でありたいと自戒を込めて思うところで。

(上續 宏道)

編集後記

本号の第1面では、塚原昭應理事長から「菩薩の心を求めて」と題した玉稿を頂戴し、学園の建学の精神に通じる「悉有仏性」「和顔愛語」「自行化他」の三つの心構えを、現代に活かす指針としてお示し頂きました。第2面では、司会の西口卓磨先生が「和の精神と対話してみよう」と題して、人権や多様性へのまなざしを重ねながら、現代社会における和の意義を深く掘り下げて解説しています。続く第3面では、看護学部卒業生が、現場での経験を通じて和の精神が息づいていることを実感するエピソードを語り、学生の皆様へのメッセージも寄せてくださいました。さらに第4面では、聖徳太子ゆかりの平隆寺と辻之垣内瓦窯跡を訪ね、歴史を辿る記事を掲載しています。編集を通じ、太子の教えが今なお私たちの生き方を支え、ご縁を紡いでいることを改めて実感した次第です。本誌が皆様にとって、小さな気づきと励ましとなれば幸いです。合掌

研究員紹介

所長 藤谷 厚生(教授)

主任 杉中 康平(教授)

研究員

上續 宏道(教授) 奥羽 充規(教授)

矢羽野 隆男(教授) 中田 貴真(准教授)

李 美子(准教授) 上野 舞斗(専任講師)

坂本 光徳(専任講師) 西口 卓磨(専任講師)

若松 正晃(専任講師)

客員研究員 桃尾 幸順

(藤谷)

(職位・五十音順)

UPAYA(ウパーヤ) 27号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和7年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代)

URL:https://www.shitennoji.ac.jp/

「UPAYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はごちらへお寄せください。

E-mail bukken@shitennoji.ac.jp

(件名は「ウパーヤ」としてください)

